

審査講評

立正大学品川キャンパス・第一次施設整備事業設計プロポーザル選定委員会 委員長 倉田 直道

本プロポーザルは、立正大学の経営方針や大学の教育理念を踏まえ、「品川キャンパス」という資源を未来に向けてどのように有効利用していくかをとりまとめた「品川キャンパス・マスタープラン」（2015年4月策定）と「品川キャンパス・第一次施設整備基本計画」（2016年3月策定）に基づき、大学が新たに取得した敷地の利活用を中心に、施設の新築及び既存建物の建替え、改修、さらにそれらの建設に伴うローリング計画（移転計画）を大学と一緒に検討してくれる設計者を選定することを目的に実施された。

本プロポーザルを実施するにあたり、学外のキャンパス計画の専門家3名と大学理事2名からなる選定委員会を組織し、選定委員会においてプロポーザルへの提案を要請する設計者候補のリストを作成したうえで、大学キャンパスの抱える課題を理解し、将来の新しいキャンパス像を提案できる大学施設の設計経験と設計技量を有する12者にプロポーザルへの提案を要請した。その内、7者から提案要請の受諾を得、その7者の提案書に基づき一次審査を行った。7者からの提案は、何れも「品川キャンパス・マスタープラン」を真正面で受け止め、立正大学品川キャンパスにおける新しい大学施設の在り方を積極的に提案したものであり、一者一者のプロポーザルに投入したエネルギーと熱い思いが伝わってきた。また、大きな高低差のある地形条件、既存建物に接続するための構造など技術的制約条件、大学の活動を継続しながらの工事など、非常に困難な設計条件にも拘わらず、そうした条件を克服したうえでの将来の大学教育施設へのチャレンジングな提案に対しては、選定委員会としても心から謝意を表したい。

非公開、匿名で行った一次審査では、提案された内容を基に、品川キャンパス・マスタープランにも記されている次の点を重視して審査を行い、総合的にバランスが良く、委員から高い評価を得た4者を一次審査通過者として選定した。

- ・ 既存建物（11号館）と一体となった大学の顔、キャンパスの顔となる施設についての提案
- ・ 立正大学の教育・研究に対する理念を体現したこれからの学習研究環境についての提案
- ・ 多様な学生の居場所、学習活動を活性化するキャンパスコモンについての提案
- ・ 地形を活かした動線計画と空間計画についての提案
- ・ 地域社会との連携を促進する地域に開かれた施設についての提案
- ・ 環境や維持管理に配慮した施設についての提案
- ・ 将来の教育・研究ニーズの変化に対応した柔軟な空間計画とマスタープランに基づくキャンパス整備の次のステップに繋がる提案

二次審査では、公開で各提案者による提案書に加え模型を使ったプレゼンテーションと各委員によるヒアリングを実施し、提案の趣旨をより明確に把握した上で、非公開で審査を行った。審査においては、それぞれの提案について様々な角度から討議を行ったうえ、慎重かつ公平に審査し、最優秀者、優秀者、佳作を選定した。最優秀者（飯田善彦建築工房）は、次の点を重視した経験、技量、考え方が高く評価された。

キャンパス・マスタープランに基づき大学が求めた多岐にわたる要求にバランス良く応えたとともに、それを新しいキャンパスの魅力として空間化した提案である。取り分け、品川キャンパス整備の課題とマスタープランに対する理解はキャンパス・マスタープランの策定に係わった関係者も感嘆するほどのものであった。今回の整備対象となる施設にとどまらず、キャンパス全体を視野に、キャンパスの顔をつくり、広場を重層化し、大学キャンパスの中心を再定義し、キャンパスリングを完成させるという、今後のキャンパス整備の展開を踏まえた提案は、他の提案には見られないものであり、高く評価された。都市とコモンである中庭を直接繋ぎ、山手通りからキャンパス内に人々を誘う新たなゲートウェイとしての丘状の地形を活用した大階段は、それ自体がキャンパスコモンであり、立正大学の様々な活動が表出する大学のショーケースであり、地域に開かれた大学を象徴する空間になっている。また、奥行きのある丘状の地形に起因する動線や床レベルの分かり難さなど、現在のキャンパスの課題を解決するだけでなく、ゲートウェイ空間としてキャンパスの個性や魅力に転化させる提案はマスタープランの指針に合致するものであった。ステューデントコモン、ラーニングコモン、ルーフオアシスの3層の広場状空間をゾーンの間に挿入し、地域連携ゾーン、学習ゾーン、研究ゾーンを立体的に区分した分かりやすい空間構成もマスタープランの考えを具現化したものとして評価された。また、ゾーンの間に挿入された広場状空間は風の抜ける立体的な緑化空間でもあり、建物密度が高い都市型キャンパスにおけるエコキャンパスの可能性を示す提案としても評価された。キャンパス整備に伴う建物の建て替え、改修、ローリング計画を大学と一緒に考えるための取組体制として品川キャンパス計画室の創設や、工期短縮、コスト削減、品質確保、安全対策に配慮した高いレベルのプロジェクトを実現するために、基本設計終了時において技術提案型+総合評価方式により施工者を選定し、共同で実施設計を進める提案も、検討に値するものとして評価された。

また、第2次選考に残った4者からの提案は極めて多彩で、選外となったものも含め、マスタープランに応えたすばらしい提案であった。優秀賞の山本・堀アーキテクト案は、奥行きのあるキャンパスの中心に地形を活かしたキャンパスコモンと動線空間を兼ねた路地坂、辻広場を配し、カフェや食堂の重ね使いなど、多彩な学習空間の使い方を示したうえで、キャンパス全体を学習環境とする提案であり、新しい大学施設のあり方の提案として評価された。佳作のシーラカンズアンドアソシエイツ案は、学生の居場所やキャンパスコモンを、地形を活かし、吹き抜けを介して、重層的、連鎖的に配置し、学生の多様な活動を可視化させることで学生の活動を活性化させる提案であり、大学のシンボルは学生の活動であるとするゲートウェイの考え方は共感を得、評価された。佳作のSALHAUS案は、オープンな「ラーニングモール」とゆるやかに囲われた「コモンルーム」で構成される豊かな学習環境の創出を目指した提案であり、分散配置された「コモンルーム」の空間イメージや屋上庭園に配置されたカフェ/コモンラウンジのデザインは評価された。それぞれの特徴ある提案に加えて、いずれの案も、地域に開かれた大学を象徴する魅力的な地域連携機能が提案されて

おり、また大学と設計者の協働体制や進め方についても提案があった。最優秀案と他の案との評価を大きく分けたのは、マスタープランを踏まえた、大学キャンパス全体への配慮と将来のキャンパス整備に連続展開する敷地を越えた施設整備の提案であった。

今回プロポーザルでは、立正大学のキャンパス・マスタープラン踏まえた、将来のキャンパス整備に繋がる大学の新しい顔となる建物に相応しい設計者を選定することができたと考えています。詳細に検討されていない条件下における提案は、現時点で必ずしも万全ではないが、今後設計を進めていく中で様々な課題を克服し、素晴らしいキャンパスづくりが実現することを心から望んでいます。総じて見れば、大学教育施設という建築に対する貴重な提案が集約された、実りあるプロポーザルだったと思います。今後これらの提案が立正大学ばかりではなく、同様の施設づくりに活かされていくことを期待します。